

その翌月、故仁左衛門の平作で重兵衛を演る吉右衛門が偶然機敷に來て熟聴してゐた姿と重厚な澁さを持つ東廣の熱演が今猶腦裡に残つてゐる。

巨怪な大力士が年とともに消えて行く様に堂々眞正面から淨瑠璃とガツチリ取組む底力のある東廣の如き藝脈は、これからの女義には到底求められなくなるのであらう。噫

南方松若氏に反對

本誌同人 岡田 蝶花 形

貴文淨瑠璃新體制を讀みました、誠に結構な御意見ですがその中只一ヶ所、三百九十六號十三頁の終り頃から十四頁へかけての御意見『褒める方はいくら褒めてもよいが批評を無暗と露骨に書く事は最早先の永からぬ人に只侮辱を與へる計りであつて何等藝術的向上に効果はなく、新體制の精神にも悖る行爲である』の件はその考こそ舊體制の權化である事を御自身氣がつかれないのであるまいかと思ひ、その意見だけは私としては絶對に反對だと申上げる。

それぢやお前が最早先の永からぬ人を悪く書いたからいふのか又書きたいからそんな事ぬかすのかなどといやに殺氣立つて來られるかも知れぬが、そんな氣は毛頭ない事をお斷り

する、又褒めたから喜んで居たの、悪く書いたから怒つて居たの等そんな内幕は一切知らない、又よく書いたから自分の懷中が肥つたなどの商賣では勿論ない。つまり批評は書くがそれで生活をしてゐるのではない。私の生活はチャンと醫師法といふ法律の下に大正六年十一月に登録番號を受けてゐる天下に隠れもない醫者であるから御心配無用、只近頃私の交際してゐる義大夫を語るのがあまりにも上手な人とか、一流の義大夫好みの紳士とかいふ人が貴下と同じ様な論を發するにあきれて物が言へなくなつてゐる矢先、貴文を見たから書きたくなつたまでである、即世間一般は貴意見と同様であるから何も貴論へのみ反對といふつもりはない、世間への反對に書くのである。それぢやお前の論を先に書けといふなら、曰く「藝術向上に効果のあるのは褒める事は一切書かず、先が短からうが、永からうが、悪いと思ふ事は遠慮なしにドシドシ批評する、それが書く人に充分の経験があらうがなからうが何方でもよい、どんな科學的揚足取りでも何でもよい、思つた事はドシドシ發表する事が多少なりその人の刺戟となるのでこれこそ望ましい所である、只その時藝以外の人身攻撃は絶對にいけない、はじめて義大夫を聽いて何等の経験のない人の意見などはもつとも聽いてみたいところである。」以上の如くしてそしてその爲にもしその藝術家の評判が悪くなるやうなら、紙上に書くなくても人の口にはそれを甲か

ら乙へと喋つてゐるだらうからどうせその人の藝の餘命は幾何もないのである。筆で書く書かぬそんな事で支配されるやうな藝術の生命であつてはたまらぬ、御存知の淨瑠璃の文句で云へばそれ「人の口には戸は立てられぬ」か。

よく私が素人の義大夫の元老とか横綱とかいふ人に會ふと天狗雜誌で津大夫はながコキ下されてゐる、津大夫はんも可愛さうにといふさゝやきを聴くのである、まるで己が津大夫自身の如き口ぶりである、果して津大夫は怒つてゐるかどうかその人の身にならねば分るものではない、それなのに壊される身にもなつて見たまへとか、さもその人自身が津大夫なり何なりのつもりで云ふのであるが、まづそれは己れの考へであると思へばよい。苟くも人の上に立つものはそんな批評など恐がるものは一人もあるまい、寧ろドシ／＼正直な一般聴衆の聲をきいたがるもので、お世辭に賞められるなどは望むまい。

以上私は津大夫を惡くいふた元兇ではないが、少くとも私は斯く思ひつゝ貴御意見など以つての外のことであると思ふから述べたのである、尤も貴君にしては貴意見を一旦發表したのでから飽く迄尊重して私の意見などこそ怪しからぬものなりとドシ／＼筆陣を布いてお書き下さらばそれでいよ／＼私の意のあるところも鮮明され又々御指定のところでも御答へするに吝でなく決して逃げも隠れも致さぬものである。そして

その主義の下に毎月「淨曲研究」といふ四頁の雜誌を發刊してゐるものであると廣告めくが申上げる、もつともその誌は誌でも新聞紙風の小さなもの故素玄淨曲研究會といふほんの東京での素人と玄人の三四十人の團體の毎月の演奏の批評に止まり他へは一寸手が出ないから、大阪方面迄拜聴に出掛け御心配下さる惡批評を申上げる事は仲々ないから先づ御安心を願ひたいと申上げるのである。(以上)

(追加) 終りに斯く書いて貴方の職業を樋口社長に聴くのを忘れた、否それが分つてから書くのと勢が鈍るから寧ろ聴かなかつたのだ。貴下が百萬長者のえらい人でも博士でも何でもよい、たゞよく松竹の人とか専務とかは新聞雜誌の評が世間を動かすと極端に恐れて時々暴論にも惡く書く奴を葬れと宣ふが、まだまだその御考へはお若いとだけ致へて置いて萬一貴下がその社會の人であつたら眞面目ならんな論は度々はお断りすると明言する。

猿之助の「吃又」

本誌同人 内田 富太郎

東劇の正月興行畫の部に猿之助が「吃又」を出した。随分派手に演つて、多少賑やか過ぎる難はあるが案外擱んでゐる